

立ての『村の婀娜娘』が既に書き上げられている物語を底本としているとは想像し難い。或いは（後に笑劇として脚色される）「グレート・ウィングルベリーの果たし合い」が念頭にあったのかもしれないが、たとえあったにせよオペラには不向きなため、ハラは新たに台本を書き下ろすよう依頼していたに違いない。

ジョン・マクローン宛 [1835年12月30日付]

ファーニヴァルズ・イン。水曜朝

拝復

いざ新作が上演されるとなると如何ほど新聞編集主幹や社主の千一人に垂んとす馴染みが倦まず弛まず優待券を手に入れようと躍起になるものか、恐らく思いも寄られないでしょう。ドゥルアリー・レーンのチケットが今晚予約済みなのは分かっています。明日のチケットが手に入らないかブラックに一筆認めました。それも予約済みなら空いている最初の晩のチケットをと。小生^{せんいちにん}今夕連絡を受けることになっているので、貴兄^{きけい}には明日お報せ致します。

残念ながら第一巻に誤植が一、二箇所見つかりましたが、よほどの熟練の目でもない限り気づかないだろうと自らを慰めています。「黒いヴェール」を気に入って頂けたとは何よりです。表題は我ながらなかなか気が利いていると思います。というもありきたりでない上、主たる様相を幾許かなり証すことに筋の興趣を殺ぐには至っていないからです。

クルックシャンクは土曜まで待つことにします——その時までには何か拝見させて頂けるでしょう。

敬具

チャールズ・ディケンズ

ジョン・マクローン殿

申し遅れましたが優待券は二人用です。

（注）「黒いヴェール」についてはキャサリン宛書簡（35年11月27日[？]付）注参照。母親はクライマックスまで顔を黒いヴェールで覆っている。追而書き「二人（two）」には二重下線。

トマス・ミトン宛 [1835年12月31日付]

ファーニヴァルズ・イン。木曜夕

親愛なるトム

今晚は家で、独りきりだ。この間会った時同様書いてはいるが、フレッドはお役御免で、クリベッジの手合わせに出かけて行った。会えれば何より——
不

チャールズ・ディケンズ

トマス・ミトン殿

（注）本状は素描「新年」（『ペルズ・ライフ・イン・ロンドン』（36年1月3日付）掲載）の原稿の断片に裏書き。断片の表にはディケンズの筆跡で「4」（即ち、執筆中の素描の4頁目）と記され、下に草稿が4行綴られているが、左端がちぎれているため各行五文字程度の欠損。ただし、『ボズの素描集』（同題で拙訳書）260頁に照らせば、「4」は第四段落の可能性も。

ジョン・マクローン宛 [1836年1月7日付]

ファーニヴァルズ・イン13番地。木曜朝

拝啓

小生この所「素描^{スケッチ}」のための新たな表題を考えようとしていないのは次のような理由によります——即ち、本全体ではないにせよ大半は既に世に出ているという。かような要件の機械的な手筈は存じませんが、他の全頁の見出しについて『ボズの素描集』という文言を変更すれば必ずや全体の印象が帳消しになるような気がしてなりません。もしや何か新たな本扉が思い浮かべば、是非ともお聞かせ下さい、早速検討させて頂きたく存じます。ともかく目下の表題が気に入っているのはたださりげないと同時に控え目だからにすぎません——駆け出し作家が見失[わぬ]に如くはない二大必須要件たる。

ジョージ・クルックシャンクが月曜にここへ来た際、週末頃には小生に彼の^{うち}家まで足を運び、夕べの一時を過ごしながら図版を見るよう一筆認めると約束

して帰りました。恐らく今晚か明日には連絡があると思います。連絡のあり次第そちらへお伺い致します。

エインズワースが「ニューゲイト視察」に高評を賜り、ばかりか我々の手続き全般に親身な関心を寄せてくれているとは光栄の至りです。彼はもう「黒いヴェール」を読んだでしょうか？

敬具

チャールズ・ディケンズ

ジョン・マクローン殿

そろそろ広告を出し始めても好い頃合いでは？——誰も彼もに同じことを尋ねられます。

(注) ウィリアム・ハリソン・エインズワース (1805-82) は英国の歴史小説家。代表作に『ルックウッド』(1834), 『ジャック・シェパード』(1840), 『ロンドン塔』(1840)。35年にディケンズと知り合い、版元マクローン、最初の挿絵画家クルックシャンク、未来の伝記作家フォースターを紹介する。

ジョージ・クルックシャンク宛 [1836年1月7日? 付]*

ファーニヴァルズ・イン。木曜朝

拝啓

拙著のささやかな序において御芳名を挙げさせて頂いたもので、御一読賜るべく拙文を同封の方が好かろうと心得ました、御異論なからうとは存じつつも。明日中に印刷所へ回す予定にて、明朝遣いの者にお返し頂けましょうか——そのため伺わせます。

令室に御鶴声賜りますよう。

敬具

チャールズ・ディケンズ

ジョージ・クルックシャンク殿

(注) 『素描集』第一集初版序においてディケンズは新刊本を「測風気球」に準え、著者は気球に己自身のみならず将来の令名の希望全と、将来の成功の可能性全を乗り込



『ボズの素描集』本扉

ますと抱負を語り、そのため欠く可からざる「力添えと同伴」を仰ぐ名立たる個人としてクルックシャンクに言及する。著者の隠喩に則り、クルックシャンクの物した本扉挿絵の気球ゴンドラにはディケンズと画家自身と思しき人物が載っている。

ジョン・マクローン宛 [1836年1月8日付]

ファーニヴァルズ・イン13番地。金曜夕

拝啓

今晚広告を「クロニクル」へお送り頂けば、小生から印刷業者へ縦欄^{コラム}のトッ